

H24. 5. 26

終末期の脱水は友

Dr.

和



「平穩死」シリーズ④

現代人は「脱水＝悪」と刷り込まれすぎているように感じるのには私だけでしょうか。というわけで今回は脱水の話です。

確かに今年の夏は節電の影響で脱水対策が以前にも増して重要でしょう。脱水は時に命にかかわるため、適切な対応が必要です。ただし、あくまでこれは元気な人、これからまだまだ生きる人の話です。すでにがんや老衰で不治、かつ末期の状態になり、

よく「胸水や腹水を抜く」と言いますが、水分と一緒にアルブミンという貴重なタンパク、栄養素も抜いています。赤血球を除いた血液を抜いているようなものです。血液をたくさん抜けば当然弱ります。抜いても抜いても水はすぐにまたたまってきます。抜いた分だけ点滴することが多いようです。しかし、それでは何をしているのか、さっぱり分かりません。

がん性腹膜炎 主に腹部原発のがんが播種性に腹膜転移した結果、腹水貯留、腸閉塞、尿管閉塞などを引き起こす病態。胃、腸、肝臓、胆嚢、膀胱、子宮、卵巣などのがんの終末期に多く起こる。

「がん性腹膜炎」は「がん性腹膜炎」です。幸い胸やおなかの中には何れも水が「貯水」されています。しばらくはその水を飲まない、飲まないのに尿はけっこう出ます。1週間たつと、果たして胸水・腹水はかなり減り、行動範囲が広がりました。もはや胸水を抜く必要がなくなりました。患者さんもすっかり「水を抜く」ことを忘れていきます。脱水のおかけでおなかの中も消化管粘膜のむくみも取れました。全身のむくみも取れて、心不全、呼吸不全、腸閉塞が改善され、また少しは食べられるようになりました。そう胸水・腹水は「ラクダのコブ」だったのです。「脱水は友ですよ」「胸水、腹水、あわてて抜かなくても大丈夫！」などど毎日どこかの家で言っています。

在宅現場では胃がんや大腸

確実に今年の夏は節電の影響で脱水対策が以前にも増して重要でしょう。脱水は時に命にかかわるため、適切な対応が必要です。ただし、あくまでこれは元気な人、これからまだまだ生きる人の話です。すでにがんや老衰で不治、かつ末期の状態になり、

大きい病院から「週3回2回必ず胸水を抜かなければならない末期がんの患者」の在宅医療を依頼されました。訪問すると、おなかにはパンパン、ゼイゼイ呼吸で苦しそうです。胸水もありました。もちろん食事は食べられません。多くの医者は本能というか性というか、そこで必ず点滴補給をしたくなります。しかし、そこをグツと我慢して利尿剤を使いながら様子を見ます。そもそも人間の生存には水分は必須。もし口から水が飲めないのなら、体内にある水を使うようになりま

おかけでおなかの中も消化管粘膜のむくみも取れました。全身のむくみも取れて、心不全、呼吸不全、腸閉塞が改善され、また少しは食べられるようになりました。そう胸水・腹水は「ラクダのコブ」だったのです。「脱水は友ですよ」「胸水、腹水、あわてて抜かなくても大丈夫！」などど毎日どこかの家で言っています。

在宅現場では胃がんや大腸

自然な省エネモード見守る勇氣



長尾和宏 (ながお・かずひろ)
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。労働衛生コンサルタント。関西国際大学客員教授。53歳。ブログ(<http://www.nagaoclinic.or.jp/doctorblog/nagao/>)が好評。

す。すでにがんや老衰で不治、かつ末期の状態になり、

「脱水は友、胸水・腹水ありませぬ。すでに省エネモードに入っただけで利益はありません。しかし、脱水を黙ってただ見守ることは、現実にはけっこう勇氣が要することかもしれない。平穩死の条件、4つ目は「脱水は友、胸水・腹水ありませぬ」です。